き尤も恐るべき敵の包圍運動を防守し且時機に從ひ逆襲を行ふを要す

一、最後の突擊は敵の著しく動搖し或は敵の抵抗力衰退したるときにあらざれば實施し得ざるものとす然れども總指揮官は好機に際し突擊の命令を下すことに注意すべし、散兵線近距離に達し火力をして最高度に達せしめ以て充分に準備したるときは喇叭手をして突擊の號音を吹奏せしめ、突擊に移り、次て吶喊し敵中に突入す

一、戰鬪中指揮官は諸種の命令を下すこと甚た困難あり、之が爲め指揮官は適當ある位置を撰定するを要す、又實施者は其指示せられたる目的に向て共同動作を爲し其獨斷專行は指揮官の意圖の範圍內に於てすべし

一、小隊長は其小隊の射擊効力を監視し得べき地を占位し、射擊目標を規定し敵の動靜に注意し、隣接せる小隊と協力するを勉め、又敵に接近し或は包圍を試み或は敵の弱点を利用し得べき方法等を探知するを要す

一、分隊長は小隊長を補翼し指定せられたる區域內を散兵を配布し、武器の使用、照尺の裝置及彈藥の消費に關し其責に任す

一、兵卒は剛毅、勇猛にして思慮及果斷を有せざるべからず、此性質は最大危險の時機に在て最も必要あり、兵卒は命令あくして停止し或は隊伍を離るゝが如きは嚴禁たり

四　戰鬪命令の凡例

左の凡例は戰鬪行軍中敵の歩兵先頭高宮北端に現れ其集團せる歩兵約二中隊は高宮に進入せずして偵知し、大隊は犬上川以南に擊退せんとし先づ大行李に停止を命したる后左の命令を下す

戰鬪命令（口演、於地藏村）

一、敵は高宮を占領せり

二、大隊は土田村方向より攻擊せんとす

三、前衛は大堀南端を據守すべし

四、第三中隊（一小隊欠）は沼波南方より西方に牽制することを力むべし

五、予は第二第四中隊及第三中隊の一小隊を率ゐ高宮東方に向ひ攻擊す

五　斥候勤務の要領

斥候は搜索をなすべきものあれば其進退動作に深く注意し、速かに敵の兵力及動作を發見し報告せざるべからず、戰鬪は多くの場合に於て此報告に據り開始すべきものあり、故に斥候に能く沈着し尤も剛膽にして慧敏に動作し殊に熱心あらざるべからず、又靜肅にして喧噪あるべからず、且屢々停止して響音を聽取し、敵眼を避くることに注意すべし

斥候我歩哨線を通過するときは其近隣の歩哨に其往く所の方向を告げ又其歩哨の見聞せし新狀況を聞き歸路には歩哨の監視區內に於て敵に關し見聞せし事件を單簡に告知すべし

斥候は敏達の長に少くも二人の兵卒を附し緊要の場合に在ては其長に將校或は下士を以て之に任ず

六　前哨勤務及其配備の要領

前哨は敵の情況を搜索し休止の軍隊を警戒するを以て任とす、故に前哨は自ら戰鬪を求めず靜肅を妨害すべき動作は最も戒むべきものとす、

然れども敵襲に對しては前哨は常に完全ある戰備を整へ全力を竭して抗戰せざる可らず、故に各幹部は常に其身を犧牲と爲し本隊掩護の責任を完ふすることを忘る可らず

前哨は通常分て前哨本隊、前哨中隊とあす而して前哨中隊は小哨若しくは獨立下士哨を出して警戒す

前哨司令官は其命を受くるや直に地圖に據り前哨の配置に關し命令を下す其事項概ね左の如し

簡短ある全隊の景況（敵軍並に我本隊の所在）

前哨中隊の警戒すべき地の區域及其概畧の位置

敵襲に際し取るべき處置等

前哨本隊の位置及前哨司令官の居處

炊爨は前哨本隊に於てし速かに分配するを要す

前哨中隊は敵方に通ずる首要ある道路上に位置し、命せられたる區域の警戒に就ては身を以て其責に任

ず、故に中隊長は其中隊を次級幹部に豫定の地点に引率し來ることを命し、成るべく急歩して其中隊より前方に進み速かに地形を偵察し、其中隊の位置及其取るべき警戒法を定む、此警戒法は切要ある道路及要点の警備には小哨を用ひ、小哨の連絡及側面の警戒を補ふには獨立下士哨を用ふるを原則とす

前哨中隊及小哨には其隊を警戒し及前方の部隊と相瞻望する爲め近傍に一の單哨(要すれば復哨)を備ふ之を銃前哨と云ふ

小哨は最前線に在て警戒を擔任せ故に小哨長は注意周密にして職務に勉勵おらざるべからず、此小哨には小隊或は半小隊を用ひ、敵方に通ずる道路及要点には複哨若くは下士哨を配置し警戒をおす、

小哨長は其哨所に就くや爲し得る限り黄昏前に能く其地形を認識するを要す

歩哨の配置は通常一哨所に屬する六人の兵卒を一人の下士或は上等兵に引率せしめ各捷徑に由て豫め指示したる地点に就かしむ、而して小哨長は各哨所に

至り歩哨に特別守則を授けたる后第二第三番組の交代兵は歩哨掛りの引卒にて小哨に歸らしむ

小哨長は其哨所に歸還の后歩哨に充てざる者より若干の斥候を區分し尚殘餘の兵を以て傳令使及其他の勤務に充つ、而して成べく速かに單簡おる略圖を以て其配置法を中隊長に報告し相隣する小哨若くは獨立下士哨と交通し連絡を取るべし

歩哨線に在る歩哨一般の守則左の如し

歩哨は絶えず敵方を監察し凡て疑はしき徵候に注意し若し敵に關し發見せしことあれば其一人は小哨に報告すべし、若し猶豫せば危殆に陷ると認めば急射擊をおし警報すべし

晝間は我軍の者は出入を許す其他は査哨に至らしむべし、若之に從はざれば射殺すべし、

夜間歩哨に近づく者あれば銃を搆へ先づ止れと呼び次に誰かと問ふべし若し止れと呼ぶこと三次に至るも尚止らざれば射擊すべし、其他の處置は晝間に同じ、

敵の一將校僅少の兵卒を率ゐ白旗を飜し、或は號音若くは其他の記號を以て遠方より軍使たることを標し來るときは之を待遇するに敵を以てせず指示して査哨の方に往かしむべし、此規則は敵の單獨兵銃を投棄し或は之を倒に携へ或は遠方より呼びて其降參人たることを標する時に於ても亦適用す、然れども降參人は先づ武器を放棄せしめたる后査哨の方に往かしむべし

小哨長の歩哨に授くべき特別守則は左の如し

一、其歩哨の番號、隣歩哨の位置及其番號、一、敵情、特に監視すべき地方及顧慮すべき村落等の名稱、一、査哨、小哨、前哨中隊の位置此各位置に通ずる捷徑、一、銃の携帶法、一、隣歩哨との連絡法等

歩哨交代時間は小哨長之を規定す、此交代には必ず歩哨掛下士上等兵の監視を要す

査哨は我軍の者たること判然疑おしと認定すれば通行せしむ、其他は小哨へ送るべし、軍使(先づ其眼を縛し)及降參人も亦小哨に送るものとす

前哨には巡察を派遣し歩哨線内を巡視せしめ歩哨を監視し且歩哨を配置せざる土地を搜索し、比隣小哨と連絡を通ず巡察は通常長と共に二人より成るものとす

七　前哨命令の凡例

左の凡例は歩兵一聯隊中山道を南進中鳥居本に宿營し其前哨を芹川に配備す、同日敵は鏡に達したるの狀況おり

前哨命令　三月十日午后四時三十分於原村

一、敵は鏡附近にあり

聯隊は本夜鳥居本に宿營す

二、當大隊は前哨に任せらる

三、第一中隊は地藏村に位置し前哨中隊とおり右翼東沼波村より左翼大堀東方三叉路迄を愛知川方向に對し警戒すべし

四、某軍曹は其中隊の一分隊を率ゐ平田に位置し獨立下士哨とおり朝鮮人街道を荒神山方向に對し警

戒すべし

五、第三中隊は前哨本隊直接警戒に任す

六、敵襲に際しては芹川の線に於て抗拒すへし

七、前哨本隊たる殘余の諸隊は原村に警急舍營をなすべし

八、警急集合場は原村南端畑地とす

九、予は原村南端三叉路前哨司令部に在り

制　令

一、前哨中隊以下の警戒隊は掩蔽下に入るを許さず

二、燎火を禁す

此命令を受けたる第一中隊長は左の口演命令を下す

第一項は前哨命令に同しく述ぶ(於地藏南端)

二、當中隊は前哨に任せらる

三、某軍曹は一分隊を率ゐ沼波に位置し第一獨立下士哨とゐり、右翼官線鉄道より左翼第二小哨に連絡し川瀨方向に對し警戒すべし

四、第二小隊は大堀に位置し第二小哨とゐり右翼近鉄線より左翼本道東方約三百米突迄を四十九院方向に對し警戒すべし

五、某伍長は兵卒五名を率ゐ下士斥候とゐり出町及河瀨方向を搜索すべし

六、敵襲に接しては芹川に於て抗拒す

七、殘余は此地に露營す

八、予は前哨中隊に在り

制令は前哨命令の通り達す

此命令を受けたる小哨長及獨立下士哨長は概ね同要を以て複哨及下士哨配布に關する命令を下す、其員數は前哨配備要領に基くものとす

八夜間戰鬪の要領

夜間の戰鬪に在ては諸種の地物全く其効用を異にす而して決勝点に向ひ精密に照準して射擊すること能はず、古來歐洲諸國の戰史に依るとも大軍を以て實施したることゐく唯翌日の作戰上或一地の是非奪略を要するとき等の如き場合に一部隊(概ね一大隊以下の歩兵)を以て行はしむるものにして而して此戰鬪は其目的を達し得る時恰も拂曉に至る如く計畫するを例とせり、其攻擊運動は行進方向を變することゐく目標を確定して全隊に之を指示し密集隊形を以て近く其正面前に僅少の兵卒を配布し或は全く配布することゐく接戰を準備するを最も良とす、而して夜間の運動は最も靜肅ゐらしむることに深く注意せざるべからず、又敵の最前線に在る歩哨等に接するも吶喊の音聲を揚くることゐく尙速かに猛進して小哨の位置に達せば最とも劇烈に吶喊するを宜とすること多し然らば即ち小哨は未だ應戰の準備整はざるに先ち襲擊を受け退却せんとすれば近く尾擊せられて前哨中隊又遂に抵抗し得ざるに至るべし

防禦に在ては絶えず斥候を派遣し以て敵襲の如きは遠く之を偵知することを力め、又歩哨は敵襲を知るときは速かに急射擊を行ひ警報することを怠るべからず、小哨及前哨中隊は警報に接せば速かに準備を整へ抵抗線に就き敵の來るを待て猛烈ゐる射擊をゐし擊攘することを謀るべし故に豫め晝間に於て敵の行進路を縱射し得へき位置を認識し準備し置くを要す

結　論

之を要するに演習に在ては實戰の如く危險の光景及悲慘の情狀等を示す能はす、故に多くは冒險ゐる動作を行ひ恰も兒戲に類するの演習をゐもことあり、如斯は其演習をして全く價値ゐく徒勞に屬せしむるのみゐらず反て惡習を貽し弊害を生す、宜しく實敵に對し彈丸雨中に於ける危險、悲慘の景況を腦裡に描き以て動作するを得は其効果必す多からん

天來の白矢

第五年級　門根米次郎

斯文は之去年二月草せしものにて其三月發行の本誌十六號に揭載する積ゐりしが仔細ありて第十六號には冷血動物、長幼の序の二文のみ出されし餘は次號に出す事とゐれり然るに次號即ち第十七號にも都合により出されず終に今に到りしゐり顧みれば此文をゐしてより茲に一年を經、其中には時機を失したるものも有りて物足らぬ

感はあれどさればとて未完の文を出して其儘止むべきにもあらず依て餘を本號に出す事とせり讀者之を諒せよ

△試驗場

点數乞食よ嗚呼点數盜賊よ若し目を有する人あらば若し耳を有する人あらば、見よ彼等の樣を聞け彼等の語を、試驗場(特に平常試驗)何ぞ爾く不神聖なる。驚くべし級中過半の人は皆此種の盜賊を免れ得ざる也悲しい哉彼等の眼中点數の外には道義なきか幼稚の腦髓未だ事の道理を辨じ能はざる小學童子すら尙且其の善惡正不正を知る豈中學生たる彼等の之を知らざる理あらむや然り彼等よく之を知れり而も微々たる目前の苦を忍び得ず五点十点を貪らむが爲め敢て自己の良心を欺き他人を欺きて平然たり何ぞ夫れ圖々しきや此の狡猾心不廉恥心は所謂江州人なる蔑視を受くる所以なり然らば道德上の罪人たる彼等を除きて屹然不正の風潮以外に苦節を全ふする者はありや否や、曰くあり然れ共其數極めて少し級中の三分の一よりも少なからん。

嗚呼些々たる數点の爲めに彼等は厭ふべき不廉恥猾狡等の汚名を蒙り加之最も尊き自己の良心を欺く、思ふて是に至れば彼等の心事寧ろ憐れなる哉然りと雖も是が爲めに默止すべき事に非ず試驗場の神聖を汚す罪人、級の名譽を破る罪人、吾は其罪を問はざるべからず將た同級の好として彼等の反省を求めざるべからず、忠告よし若し彼等應せずんば熱罵を與へよ熱罵果を得ずんば鉄拳を加へよ、手段は種々あり飽迄彼等の猛省を求めざるべからず。

△何ぞ爾く無禮なる

我嘗て或學校の內情を聞く、聞くが如くんば其の生徒無賴にして師に對する道を知らず、尊敬すべき師に向ひ無道の空論を吹き掛け或は多人數を恃み師の過失を指示嘲笑し甚しきに至つては同盟休校辭職勸告等の惡德を敢て行ひ得々たるものありと、而して是は其校のみに非ず今や天下一般の通弊ありと、學生の腐敗も亦此に至つて極れる哉、何ぞ心得違の甚しきや。

飜つて我校を顧れば、四五年以前迄は是等忌むべき風潮中に捲き込まれ隨分不穩の行爲少なからざりと雖も今や慈愛懇切なる諸先生の大に訓導に意を注かれ、弊風矯正に力を盡されし結果是れ等の惡弊は殆んど跡を絕ち校風大に揚りしと雖も未だ全く之を盡す能はず、豈亦恨嘆の至ならずや。予は屢或先生の授業時間に於て二三の庸漢と之に屬する一團の小人輩の一時に嗤笑し或は之に雷同して授業の防害をなすを見る、然るに先生は猶彼等は見捨て給はず、彼等の不德を以て自己の足らざる罪となし、此無禮を忍んで醇々敎育に從事せらるゝあり。無禮漢よ汝若し人心あらば此の時。師の心中、縱令十分の一にても推察せよ、よしや汝は深き惡意あつて斯の如き行爲をなせしか否かは扨て措き、果して快く感ぜらるべきか、面白く感ぜらるべきか、嗚呼其の敎鞭を執らるゝ師の心中、思ふて是に至れば生等只涙あるのみ。汝等心は無きか物の理を知らぬ人か、あらじ胸には溢るゝ熱き血あらん、師の心中を思ひて若しあゝ御氣の毒と感じなば願くは以後斷然此の行爲を改めよ非を悟りて猶逡巡するは敢て男子のなすべき事にあらず、猶其の惡行を改むる能はずんば何ぞより多く威嚴ある先生の授業時間に、思ひ切騷かず、前の二三の先生の時は斯程横着を極めながら後の先生の時は甚だ靜肅たるにあらずや、何ぞ先には勇にして後には怯なる、卑劣も亦極れりと謂つべし。

不審あらば立ちて之を質すべく、異議あらば至當の道を踏んで之を辯解すべし、徒に多人數を恃みて私情を洩すは男子のなすべき事にあらず、又理非を知らず只人に寄せて雷同するならむか、吾敢て敎ふ是れ無禮の行爲なり、速に改むべし。然るに猶事理を悟らず依然此の無禮不穩の行動を繼續するに於ては衆寡敢て顧みず、我に正義の鉄拳あり義の爲め振ふに吝あらず、友が重きか、師が重きか、平素の交情を說く勿れ、予は順逆輕重の一班を知る。

△學問間の才子

學生間の才子とは抑も如何なる者ぞ、請ふ我が說く所を聞け、羅沙の服上衣短くしてシャツ顯はるゝ三四寸、ズボンの太き事恰も蒸氣の煙突の如し、頭に美帽を戴き足には華奢なる護謨靴を穿ち、三三五々伍をなして惰げに又得意氣に運動場を步むもの、所謂我々學生間の才子（我等は特に之れを小人輩といふ）にあらずや彼等は小倉服兵隊靴麻のゲートルの制裝たるを知らざるなり、其の言ふ所は聞くに耐へざる淫靡の事か、人を欺きてカケタロとか浮薄一も男子らしき動作なし。之が將來我國の中堅かと思へば、唯呆然自失の外あらざる也、美服美帽、卑猥の言語、才子風、如何に汲々として外面の裝ひに務むとも親の脛かじりは矢張り、脛かじりにして其れ以外の値を得る能はざるなり、願くば一考せよ、如何に才子達よ、學生時代には學生相當の品格行爲あり。卿等又較もすれば平和々々と叫ばんとす、平和惡しきに非ず、然れども時と用ひ樣に由りては卑屈に陷る事あり、卑屈の平和は我之れを喜ばず是亦一考を

要す、然し世には平和の語を濫用して自己の卑屈を敝はんとする者あり、斯の如き者に至りては我また敢て曰はじ。

△江州人

江州人よ嗚呼江州人、江州人とは抑も何を意味するか、金を知るもの利を知るもの、耻を知らぬもの意氣地なきもの狡猾なるもの優柔なるもの、是を總合せるもの即ち他國人の所謂江州人にあらずや。卿等聞かずや屢々校長諸先生等の此所の生徒には活氣なし、意氣地なし、教室に金椀を置け金錢の話をなす勿れ等をいひ玉ふを之れ無限の恥辱に非ずや、卿等夫れ是を思はざるか。

余は實に是等侮辱の語を聞く每に、腹綿の引き裂くるが如き感あり、脊に冷汗等は我心情を表はすに足るらざるなり、出來得べくんば校長の面前、我が熱腸を抉み出し、有骨男子の氣慨を見せ、無腸男子のみが江州人に非ざるを知らせんと思ひし事一再にあらざりしなり。然るを悲しい哉他を觀れば皆平然として感せざるもの〻如く、局外漢の趣あり、是等の語を聞く又故あるなり、あゝ是ぞ即ち江州人の江州人たる所以にして、換言すれば無神脛無腸の庸劣漢なるよ、斯の如くんば夫れ何の日にして校長諸先生より猛省劑として加へらるゝ此の江州人、世人より侮辱的に呼ばるゝ此の江州人の名を洗ひ得べきか、嗚呼前途莫然たる哉。

憤慨すべき哉、嘆ずべき哉、立てよ諸子醒めよ諸子、蹶起一番此の汚辱を雪がずや、徵たりと雖も共に事に與らんとす、宿弊を打破して茲に革命の旗を飜へさんとす、事難きに似たり、然りと雖も吾人亦男子なり、精神一到何事か成らざらむ、萬事皆決心にあり願くば苦を忍べ、節を守れ、破廉恥、卑屈、優柔、狡猾等の惡魔を一掃して廉潔果決活達尙義等の美德を涵養せよ、此の事業若し成功せば其の時の快果して如何、之に反して卿等若し恬として恥づる心なくんば江州人は江州人として依然此の侮辱を免れず、來れ恥を知る人あらば、余は君等と俱に此の恥辱を雪がんと欲す、無骨無腸の卑劣漢は敢て俱に語るに足らざるなり。

△弱肉强食

貴重なる縣費の一部を投じ三個の火爐を設置し、學生をして暖をとらしむるものは抑も何の爲ぞ、思ふに寒風飛雪を凌ぎ積雪半は水に化して冷寒極まる半流動体を蹈破し遠く來れる通學生をして衰へし英氣を再び振起せしめ、勢よく快く業務を受けしむる爲にあらずや。然りと雖も僅々三個の爐、如何にして四百の學生に一時に暖を與ふるを得べき、されば互に替り合ひ、讓り合ひて其恩惠を受くべく、是至當の事に非らずや。已に暖まりたる上級生は今や寒氣を犯して來りし下級生に其席を與へ、血氣盛にして割合に寒氣を凌ぎ易き、長年者は憐むべき幼年者に席を分ち又は與へ、俱に暖まり共に樂しむも亦愉快あらずや。然るに現在我が校の有樣を見よ、年長者は飽迄暖を取るも幼年者は與るを得ざるなり。見よ飛雪紛々、積雪皚々たる朝、之を犯して來りし幼年

學生の小さき手は凍えて赤くあり、靴はぬれゲートルの一部はあはれ氷の附着して歩めば摩れ合ひて音を發す、此時彼等の心中を察するに必ずや爐邊に來り、冷き手を暖め濡れたる靴下ゲートルを乾かしたきは山々あるべし、然りと雖も悲しひ哉其所には年長者利己の外を知らぬ上級生のあるありて、近くよる事を得ざるあり。されば止むを得ず我が息を以て僅かに我手を暖むる位、さればとて號報鳴れば教室には入らざるべからず、殊に午前中の課業は彼等にとりては實に苦しかるべし。之を知らぬ顏に自己獨り暖席を占むるか、嗚呼無慈悲ある兄分の學生よ。寒きは衆人共に寒きにて自身獨り寒きに非らず、何ぞ自己一身を利する不條理、不公平ある。

汝は眼前凍寒に叫びつゝある幼年者を見ざるか、實に無情ある哉、不條理の壓制を以て幼者を苦しめ、自身一個の利を以て得々たるか、弱肉强食とは是を云ふあり。汝等之を以て教育ある者と云ひ得るか、是が我國將來の中堅國民の行爲あるか、嗚呼！由來

弱肉强食は熱帶地の森林中に住む野獸の事あり。

喝！汝若し一片の人心猶存するあらば、何ぞ速かに其席を幼者に與へざる。若し依然之を改めず、暴威を振ふ事あらば扶弱挫强の天擧、汝が頭に亂下すべし。

然りと雖も下級生中隨分腕白者あきに非らず、徒らに雪いじり等して勝手に寒を招きしものは、此の限にあらず、今や愉快に暖惠に浴しつゝある幼年の上に、暴威を振ひ、其の席を奪ふ如き事あらば、眞に獸行、人間の行爲を以て認むべからざるあり。

△結　論

題して天來の白矢と云ふ等しくも私あるべからず、我も亦極めて公手に筆誅論究せしと自信すされば少しも用捨斟酌せざるあり、之即ち白矢の白矢たる所以請ふ觀者之を諒せよ。

予は奇扳の言論を以て衆人を驚かし、快哉を叫ぶものに非らず、好まずあがら是等過激の語を綴らしむるに至るもの罵して誰の罪か。諸子若し我が激を責めんとおらば、何時にても我快く之を受けん、我は今罵倒せし人々の中より我に無禮の罪を詰るべく來られん事の一日も早からん事を望むものあり。

過て而して改むるに憚るあかれ快然舊行に捨て正道に復す、亦可あらずや、其の非を知りて尙踐躇改むあたはざるは是眞個快男子の學ばざる所あり。

吾元來不文無筆一篇の作文すらわが『崇廣』にも載せ得ざりし者、突然斯の如き文を草す、豈故あしとせんや。

嗟夫誰か熱罵激甚の裏面、一片耿々の衷心あるを知るものぞ、其は兎もあれ唯望む所は蹶起一番惡弊惰風を打破挽回し、我が國固有の美德を發輝し、之を今にしては我校の盛名を揚げ、之を將來にしては我が國中堅民として敢て耻づる無からん事を欲するのみ、讀者諸君彼の口先のみの駄論と同一視せらる無くんば幸甚々々。

卒業生諸氏に檄す

我校は教育界に呱々の產聲を揚げしより以來年を閱すること既に十有七卒業生を出しゝこと實に數百人の多きに達せり我邦に中學多しと雖も我校の如く許多の人材を輩出せしは蓋し稀に見る所あらん豈に盛あらすや

この名譽ある我校の卒業生諸氏或は進んて高等の教育を受け或は國家の干城とあり或は政務に盡瘁し或は實業に鞅掌をかくの如く社會の各方面に中堅の國民とあつて活動せりされどもこれ推量のみ臆測のみ若し夫れ諸氏の現狀の如きに至ては杳として其消息を聞かさるあり恐らくは諸氏も亦我校の實情を知ることあからむ是れ果して我校の慶事とあすを得るか將た又卒業生諸氏の名譽と稱するを得るかこれ決して他に聞かしむべからざるあり

されどもこれ決して理由あくして此に至れるに非す我校の歷史を知るものはその當然の結果あるを了解

せん余輩今茲に喋々する要を見す然れとも單に理由あり歴史あるの故を以てこの欠點を蔽ふを得ず欠點は依然として存在せり余輩は進んでこの欠點を除却せんことを希望すこれ他おし從來諸氏の設立に係る芹陽校友會と崇廣會とを打破して一丸とおし新に校友會を組織し校の内外を問はす協心戮力事に當らば本會の隆盛に赴かんこと期して俟つへきあり而して本誌を以て内外機脉を通するの機關とおさは諸氏は我校の現狀を詳察し余輩は諸氏の消息を知悉するを得む庶幾くは諸氏奮て賛成せられんことを其益する所決して鮮少あらず

卒業生徒

第一回

高橋要治郎　津川竹治郎
小堀彌一郎　元嶋鼎三郎
守矢武男　西村禎三
樋口繁治郎　加藤常治郎
弘世助太郎　山形安太郎

第二回

馬場仙太郎　大村捨治郎
中村盈太郎　秋山辰治郎
中山好次　吉田仙之助
弘世正治郎　大神正道
伊藤惠藏　藤山銀造
窪内角馬　永田稻吉
吉田孫治郎

第六回

佐竹制心　高橋敬吉
三宅高時　青木吉太郎
前田弘　松本百之祐
村岸和兵衛　德久愛馬
中嶋芳太郎　椋田外彌
馬場利三郎　野家文之助
諸富保治　横山辰次郎
高橋鉄二郎　竹内光正

第七回

澤正勝　松宮春一郎
山田麒太郎　林好郎
藤井義雄　林田芳太郎
高橋牛也　伊藤熊
河合正禧　山本純三
松井知周　賀來助太郎
川添保三郎　藤川壽一
河村得太郎　清水九郎

第八回

小幡鉄太郎　三浦英三郎
前川貫一　橋本新一
森武三　船越芳二郎
藤田國太郎　太田孝治郎
久野三郎　田中重太郎
珠玖龜藏

第三回

壇谷靜人　古川銀治郎
堀勘治郎　岡川龜太郎
藤野珖三郎　西村惣治郎
福永吉兵衛　竹村得太郎
宮部千太郎　野中德三郎
藤川東太郎

第四回

三原金治郎　前川宗治郎
櫻井來助　岩崎寅造
小川啓三　中村勝麿
馬場良吉　相場金藏
高橋行治　大橋富三
湯本英雄　森龍太郎
山岡槌太郎　北川虎吉

第五回

川田四十一　木川行藏
飛石久太郎　大保久藤吾
山下三郎　吉田秀治郎
水口俊馬　禍嶋昌
菊池義郎　北川周三
渥美勝　里見隆一
富田八治郎　鈴木辰義
北村一　田中舘雄

第九回

木川才藏　北村他喜藏
河合正治　伊藤義市
野田儀三郎　中野文治
大橋淳三　丁野惠深
柿一郎丸　中尾等光
直原佐市　宮田鶴淵
山本小四郎

第十回

中川太一　久德隆篤
森孫三郎　山本寅三郎
金田參良　岡部文哉
名尾玄乘　大橋幹二
小川逵也　梅村準吉
野々村佐一郎　弘世孝藏
杉田治郎市　中野又左衛門
安達精三　樋口五郎
吉田泰吉

第十一回

平塚享三　小財宗一

森　龍太郎　人見鉄三
脇坂慶造　弓削善兵衛
北村和三郎　聘吹　明
岡村金藏　大神正秋
中北善之助　岩崎七治郎
川瀨兵吉　奥居重俊
遠藤九郎　古澤與惣右衛門
雨森　肇　柴田孝四郎
松井哲誠　湯本昌雄
橋本二郎　川瀨藤吉
堤　泰造　山田褒雄
森田庄五郎　岩佐定一
一圓友多　目加田平三郎
堀田圭三　中村元麿
山崎　眞　大村熊男
原田芳實　豊滿秀政
廣田平五郎　小林市治郎
金子悌四郎　河合順一
太田有秋

第十二回

三浦碌郎　山鳥吉五郎
金田政四郎　土田榮治郎
宇治原退藏　原　繁藏
海保良吉　木村靜一
北脇滿三　奥村金一郎

宮村善治郎　澤　靜夫
廉田龍馬　木川半藏
武田春美　中川喜太郎
小野孫治郎　伊藤禮治
石井光雄　堀江賢造
川勝齊治　白井五一
小見山久治郎　江南善行
柏瀨軍三郎　西岡壽貞藏
柴田　實　宮崎忍郎
安田九四郎　中居早太
松山秀美　塚越鎭三

第十三回

田川七左衛門　伊藤利三郎
北村健藏　多胡庄次
中村　進　布施卷太郎
鈴木嘉藏　青山啓四郎
小西龜藏　早川清三
布部孝太郎　吉居房次郎
田中藤馬　古山治吾平
吉松茂彦　大竹英之助
山本捨太郎　橋本太郎
湯本信雄　伊吹清一
牧　秀賢　八木原太郎作
平瀨保之助　大橋愛造
花木實　松見惠觀

力石知義　高原覺應
木村　茂　長澤慶造
西川嘉市　小出清一
鈴木泰造　中川甚藏
中村　修　石居英三郎
京藤政太郎

第十四回

廣瀨助一郎　岩田榮太郎
廣瀨勘治郎　福嶋郁三
堤　直市　下村柴郎
赤松　鑑　中澤尙二郎
佐野善二郎　畑中義雄
芥川龜太郎　村上善正
寺尾祐敎　三木謙吉
牛渡日出太郎　小松徹心
藪田勘兵衛　奥村房治郎
山本小五郎　林　富之助

宮部鐵三郎　大音政太郎
德永　璣　夏原由三郎
岩崎健三　嶋田善次
伊藤國利　三木會治郎
磯嶋喜六　藤林信敎
橋本愼二　仙波久良
松居源四郎　山上晴雅
古垣健熊　宇野順
上田昌雄　廣瀨懋
村田滿正　西川喜太郎
白井恒二郎　松岡勵
今村文碩　江畑一良
小嶋正之　貫名豊藏
小川吉郎　安藤保
藤田義亮　山本三郎
伊藤治郎

雜報

◎天長節拜賀式

げにめでたくもある哉、常盤堅盤の松が枝よりは祥氣立ち昇りて空に棚引き天部に伶人祝賀の樂を奏づ維明治天皇、第三十五年、聖誕第五十一回の寶弄を數へさせ給ふ天長の佳節、本校職員生徒一同謹んで拜賀の式を講堂に擧げたり。

◎第十三回陸上運動會

例によりて天長節拜賀式後本校運動場に行はれぬ。場の模樣を略記せんに、さきの日篠つく雨をおかして一同か落ち散る石を掃除せし坦々たるグラウンドは中央の蠶々たる一大柱により球燈と彩旗に飾られ來賓席はグラウンドを東に見て理化教室を後に卜せられ其左に幔幕うちわたせる會長席艤裝席あり、一般來歡人には北と西北との繩張りの外に場を與へ陸上部員席、負傷者手當所、雜誌部員席は競爭圏以内に設けられたり。九時半七發の號砲空にはためくや、競爭は開始せられぬ。次第に一周を增して第三回三周競爭まで皆犇々と目ざし魚のそれのやう並列して出發の際倒るゝあり。機先を制して出發せしもの多く勝を占む。

1回の1着川口敏義氏2回の1着門根米次郎氏3回の1着宮田與三松氏

第四回　千鳥競爭＝千鳥競爭とは赤白二軍に分れて之今更仰々しき說明を施さずして諸君は先刻御存知の如く見るに頗る面白く爲すに頗る骨の折るゝものにて、この競爭白軍つとめざりしとにはあらねど衆目の認めて走力稍優れりとせし赤のために敗られしは悲しむべし、是非もあし

第五回　二周競爭　1着宮田與三松氏この人走力著大これ一回を隔てゝ今又勝を占めたる所以、されど一人の走力他に比して頗る秀でたる競爭は呆氣あきものあり

第六回　武裝競爭＝義勇の二隊何れか早く全員武裝を終へて決勝線に隊伍を整ふる者ぞ、勇かあらず義ありき。

次で七八の二回は一周競爭と二周競爭あり八回にはゆくりあくも審判の鍵を握つて場内隈あく届く明眸の犧牲とありしもの二人を生じぬ節制ある今日の競爭會にかすかにても汚点を印せし罪、惡むべし、

第九回　一分間競爭　何處が決勝点の目的もあく、ドンの響きを聞く迄はと緩急の手段も用ふるに由あく皆々遮二無二先を爭ふうちに九十九秒ほいつしか經過ぎて一發の銃聲第一に立つは稻島定信氏あり

三度つむじの如き宮田に一着を餘儀あく許せし一周競爭に次で二周競爭と一周競爭とありて第十三回は和裝競爭ありき

袴の前後や足袋脚胖の左右を取違へて周章てふためき着物を着あがら、帶を締めあがら、羽織を着あがら紐をしめあがら、ちよこ〳〵走りにて旅に出で立たんの裝束を整へ決勝線まで走ればその旅は終りありけり　1着大森純一氏

第十四回　四周競爭、距離の長きだけに一氣に走る者は長く堪ゆる者に後るゝは言はでもの事か　1着兒島安右衛門氏

三上哲岩第一に決勝線に入りし第十五回は又々二周競爭にて第十六回三周競爭の1着は河邊七太郎氏大兵肥滿の人あれど野球に固めし走力思ひの外にすぐかりき。

こゝ數回の競爭に稀に中途に癈する人ありしは、自ら薄志弱行を示し給ふか、將た自己の力量をも度り得ざる人か、否あ〳〵外に理由のありて存するあるべし。

第十七回　二分間競爭、二倍の時間をさきの一分間競爭と同じく韋駄天走りに四周餘を走り走つて先登に立ちしは三上哲岩氏

時正に午あり晝食のため競爭中止、

午後一時引き續きて　第十八回千鳥競爭　白軍は今日何の因果ぞ又々敗れぬ、

第十九回　二周競爭、1着　增田　稔氏

第二十回　四周競爭　1着　丹下悌次郎氏

第二十一回　職員競爭　どよめく喝采聲裡、我等とて奥の手はありこれ見よとばかり一周を二十五分に終つて池田先生先づ決勝線に入り給ひ續ひて曾田先生、小出先生、

時に一時五十分　餘興に五色の風船を飛騰せしむるものあり。いろ美しき雲の帳のさけ目より射出す日影を慕ひて悠々と天空、南の一角を目懸けて昇りしぞおか〳〵の愛嬌ありける

二十二、三の両回は障害物競爭

其名にすでに顯証あるやう最も困難ある競爭丈、己れ一定仕らんと腕に覺えある猛者の面々、棚に、巾飛びに、竹籔垣に、勢込んで却て身輕に働かれで失敗を重ぬるありあるは蓆の底あき袋をもぐり脱けんとていとも〳〵大きある黄色芋虫の蜂に刺れて七轉八倒するかとばかり打もがき容易く脱け得ぬおんどの不覺取るこそ口惜しけれ。

前は廣瀬淵龍氏後は近藤兵一氏1着の功を収めたり

第二十四回　劔道裝競爭　義勇の両軍背中合せに出發点を出で、いとゞ急ぐや劔道裝、裝ひ給りて面に附したる瓦器わりに互に入り亂れ、しばし鎬を削りし後、決勝線に入りて敵を討取る事多かりし義組に勝は歸しにけり、

第二十五回　三周競爭　1着は丹下悌次郎氏

第二十六回　小學校生徒競爭

われ等小兵に候へば、不相應に走つては怪物と思はれ候ほどに、それ相應に走り申し候といつた風の競爭あり。

第二十七回　二分間競爭

第二十八回　和裝競爭　1着　廣崎隆一氏

第二十九回　一分間競爭

第三十回　秀生競走

各級の秀才より撰びし人々の競爭、撰手競爭に次で卅んぜらるゝ名譽の競爭、中原の鹿誰が手に落つるかと見てあるうちに三周を終つて第一着を得しは澤村專太郎氏（五年）。始めは處女の如く終りは脱兎の如く走れりといへば當らずとも遠からざるべし。

第三十一回　各級撰手競爭は來れり

見る人みあまじろぎもせで手に汗をにぎり、各級の生徒はわが撰手よかれと祈りつゝ競爭圏の外圍にひし〳〵とそゞろ心に聲を作さずして立てり

と見るうちに群集の視線を滿身に集めて各級の重き望を両肩に荷ふ好箇の撰手十人は正に出發点にあらはれたり。

やがて一發の號砲空に響き、十人の足一時に動き、數多の頓に閃き出でしが程もおく、走者十人或は先んじ或は遲れて一周を終れり、いま第一に走る人は五年級撰手高橋氏次では同玉樹氏第三は三年級撰手中西氏以下七人こゝを先途と疾驅するさま、むかしよく走しりけん押松ありとも膽を寒うすべく思はれたり。かくと見るや各級の應援一時に靜穩を亂して叫喚！呼號！

撰手はその順序を變せずして第三周に入りて半を終る頃疲れし躰の八万四千の毛穴より湯氣迸らんばかり最後の精力を傾倒して競爭頓に激甚とおれり、競爭は眞に激甚とおれり

さはれこの棹尾の一振も第三者以下の形勢を少しく變せしに止まりて、決勝の號砲、五年級の撰手が走力の優勝を賛稱して響きぬ、つゞいて起る歡喜の音聲空に漲る折柄喇叭の聲場の一隅に起る乃ち生徒一同運動場中央に凹形に整列し撰手競爭賞品授與式及び優勝旗授與式、嚴かに執り行はれ第一着高橋茂十郎氏はゆかりの色の優勝旗と第一等の賞を受けられ、玉槇氏第二等賞を中西氏第三等賞を受けられたり

万歳を三唱して散會す時に午後四時、

終りに敢て一語を加ふあゝ節制ありし運動會、眞面目ありし運動會。

○演說討論會　正に是れ吾人の口角沫を飛ばして懸河の辯を練るの好時節、我が演說討論部は十一月廿二日午後第一時より本校講堂に於て秋季大會を開けり、

先づこたび新に任ぜられたる平川部長登壇、

余今回本部々長に推擧せられしも、元より其才に非らざるを信ず、然れどもまた全力を盡して諸子と共に其責を全うせんとす、諸子幸に之を諒せよ、たゞ望むらくは辯士の所論を批評するが如き無責任の擧動あるべからず能く本會の主旨を奉じて部員たるの責任を全うせられよと、夫より十數の辯士陸續として登壇せらる、

第一席　會長　西村先生

余本校に赴任以來本日初めてこの盛大なる演說討論會に臨むことを得たり、余嘗て本會の盛大なることを聞けり、然れども余は一の欠くる所あるを感せり他なし、即ち英語演說のなきこと之なり、溺るゝ者は泳ぐことを練習せざれば遂に泳ぐ能はず、英語演說も亦然り、不能と稱して練習せざれば遂に不能に終るべし、されば次回の演說會には英語演說の續々あらんことを望む、

第二席　朋友　四年級　南部

開口一番先づ身体の愛すべきをいひ、一轉して交友のことに及ぶ、いはゞ朋友は少きより多きを尙ぶ、惡友必ずしも棄つべからず、人各々長あれば、其長を採り其短を棄つれば可なりと論じ終りて意氣甚だ盛なりき、然れども言少しく早きに失し、且つ論旨終始一貫せず、或は右に當り、或は左を衝き、猥りに難句を並べ立つる嫌あり、聽衆恍として惑へるが如し、

第三席　心　五年級　廣瀨文豪

古來心てふことに就ては、如何なる學者も亦如何なる詩人も歌ふ能はざりき、又其心は果して如何なる所に在るか、今の人は頭に在りと言ひ、昔の人は胸に在りと言ふ、されど余は心は身体各部如何なる所にも存在するものなりといふ、心こゝにあらざれば、見るとも見ず、聞くとも聞かずといへば、吾人の心は決して萬物に制せらるゝが如きものにあらずして、心は萬物を制し得るものなり、故に吾人はたゞ萬物を心とす、吾人の心宇宙の氣より成る、されば吾人の死は決して怪むに足らず、吾人の身体は有機物質より成り、心は宇宙の氣より成るが故に、死すとは唯形体上のことにして心は死せず、故に死は決して恐るゝに足らず、彼の多くの學者は類りに心に就て研究すと雖、尙不審を免れず、百姓毫も研究せずしてよく安心を、故に心を安んぜんと欲せば、佐藤一齋先生の言に從ひ、心をして常に脊に在らしむべし、猥りに心を散らすべからずと、その論ずる所高尙に過ぎて下級の諸子には解し難きやう見受けたり、

第四席　心を大にすべし　小川先生

悠然として拍手の裡に登壇せられ、

熟々考ふるに、我國民の最も高しとする山は富士あり、最も大なる河とは信濃川あり、大湖とするものは琵琶湖あり、然れども之を世界の他のものに比較せんか、實に微々たるものあり、琵琶湖の如きは大は即ち大なりと雖も而かも洞庭の十分の一に過ぎず菅に山川又は人民の小なるのみならず、國民の心も外國人に比べて非常に小なるを如何せむ、されど我等が先祖は實に大膽なりき、大抱負を有したりき、神功皇后の三韓征伐の如き、豐太閤の朝鮮征伐の如き、それ之を証するに足る、然れども現今我國の人心は實に小なり、島國根性あり、足るを知りて足らざるを知らざるなり、乞ふ、上を見るか、おごてふ諺を信ずる勿れ、希くば諸子よ、今後益々地理歷史を研究し、宇宙の大なるを知り、歐米人の偉大なるを知らば、寸時も早く我國民の頭腦より島國根性を除去せんことを努められよ、

第五席　大和心を研け　二年級　湯本辰雄

突飛壇上に登り一聲高く叫んでいはく、

今人果して大和魂を有するや、余は大に之を疑ふ者あり、殊に近江人はたゞ商賣根性あるのみにて、毫も大和魂の存在を認むる能はず、豈に憤慨すべきにあらずや、之を挽回するは、一に吾人の責あり、奮發する所なくして可ならんやと、意氣甚だ盛なりき、年少氣鋭の士寧ろ愛すべし、

第六席　行路の難と信友　五年級　野村義雄

壇上に現はれたる輕快なる風采の一士徐ろにコップに湯を注ぎ乍ら人生行路の如し、世を行く平坦の道はあらざるなり、一難を免るれば一難尋で來る、退かんと欲して退く能はず、進まんと欲して進む能はず、かゝる時に際してよく吾人の勇氣を回復せしむるものは實に朋友に俟つの外なし、失意の時に於て吾人を慰め、吾人に鞭つものは信友にあらずして誰ぞや、信友あれば行路の難も怖るゝに足らず、實に信友は第二の我なり、吾を成効せしむるものは信友の力なり、一國の治亂興亡も亦之が關係する所少ならず、諸子其れ之を思へと、唐代の故事を引証して口辯滔々數萬言を費やす、

第七席　幕末の俊豪　五年級　大久保章彥

本題に移るに先ち嘆じて曰く、同じく崇廣會の事業と雖も、陸上運動會或は端艇競漕會の如きは常に觀衆山をなし、非常に盛大を極む、然るに演說討論會には比較的聽衆些し、これ大に面白からざる現象なり、會員たる者、之が振興の策を論ぜずして可ならんやといひ、尋で本題に移る、蓋し子が得意の持論たり、

抑も幕末の偉人とは誰ぞや、これ諸子も言はずして知る井伊直弼公なることを、さて我國古今を通じて施政の最も困難なりしは德川時

代に如くはなし、特に安政年間德川幕府の末路にありては、內には開港攘夷の論喧しく、外には歐米各國の使臣を我に遣して通商を求むるなど、今更喋々を要せざるべし、かゝる難局に際して身其衝に當り銳意果斷、よく皇國を泰山の安きに置きしは實に公の最も偉とすべき功績なりとす、されど不幸にして時人に容れられず、遂に櫻田門外に果敢ふくなりしは、實に千載の恨事なり、嗚呼十九世紀の直弼は既に逝きて亡し、余は茲に二十世紀の直弼が、一日も早くこの近江の地より出でんことを望むと、熱情面に溢る

第八席　能辯と演說家　草塲先生

轟き渡る拍手に迎へられて悠々壇に登らる、

只今辯士大久保氏は聽衆少きを嘆せられたり、然れども余思ふに、斯く試驗前に於て、かくも多くの會員の集まられしは決して他に求むべくもあらず、余は諸子が本會に對する熱心を深く多とす、

さて余が本日諸子に告げんと欲する所は他にあらず諸子よ世の所謂演說家とある勿れといふにあり、諸子が本會に於て辯を練るは、演說家とある爲めにあらずして諸子は常に實の收入に勉め、此の大會に於て其實の陳列に力を勉むべし、望む所は徒らにかの輕薄ある風に習はず、諸子が日々切磋琢磨の功によりて得たる所を明白に言ひ表はさんことを勉めよ、

然れば諸子は期せずして能辯家とあるを得べしと、尙ほこの外辯士數多ありしが、時間の都合により其雄辯卓說を聞く能はざりしは遺憾ありとす、

これより討論に移る、時に城山の鐘聲五時を報じぬ

討論題、金錢と名譽と孰れか重き

先づ平川部長登壇、討論題に就て解釋を與へられ、併せて希望を述べらる、衆肅然として聲あし、議長頻りに發言を促す、此に於て忽ち寂寞を破りて一聲高く叫ぶ者あり、いはく金錢は名譽よりも遙かに重しと、既にしてこれが導火線とあり、舌戰漸く酣にして、甲論乙駁沼々として底止する所を知らず、議論百出縷々として盡きざるものあり、金錢を重しと主張せる論者には花木、近藤、野村義、岡田、今村種村、湯本、廣崎、淸水、西村、谷本等の諸子にして、快辯爽舌、論據堅固にして勢當るべからず、之に反して名譽を重しとする者、曰く柴田、曰く門根曰く中野、曰く廣部、曰く高橋、曰く室谷、曰く南部の諸子にして、何れも校中の錚々ある者、議論鼎沸殆んど盡くる所なし、かく両軍相戰ふこと良々久しうして、忽ち休戰の命あり、議長いはく、多數を以て決を結ばんと、名譽を重しとするもの過半を占む、茲に於て部長の閉會の辭を以て全く局を結べり時に夕陽西山に沒し、城山の晩鐘六時を報じぬ、

◎寄宿舍の改革

回顧すれば昨年五六月の事にてありき、我が寄宿舍に於ては、舍監の更迭頻繁にして舍生の氣風も暗々裡に弛み、舍則も何時とあく行はれず、今や復た救ふべからざる弊害に陷らんとするに至れり、時の舍監主任坂田先生、深く之を憂へられ、病軀を以て此難局に處し、滿腔の熱誠を絞りて寄宿舍の爲め大に盡瘁せられしかば、漸く効果顯はれて、舍風今や舊に復せんとせしに、先生は俄然病の故を以て舍監の職を退かれ、尋で本校をも去らるゝ事とありぬ、衆之を聞きて惜まざるは無かりき、然れども小出先生其後を繼ぎ、他の舍監諸先生と共に献身的熱心を以て、銳意寄宿舍の改革に意を注がる、殊に先生は永く軍隊に在りて修養せられし嚴肅ある規律の許に、舍生の氣風養成に力を注がれ、或は一同を引率して山野を跋涉し、或は一堂に會して茶菓を喫し談笑の裡に一家團欒の樂を享けしめらる、嚴ある時は即ち嚴に、緩ある時は即ち緩によく其別を明にし、專ら舍の改善に意を注がれしかば、舍風大に改まり、よろづ整頓して殆んど遺憾ある きに至れり、而して八十の舍生は互に兄の如く弟の如く、敬愛幷び行はれ、和氣藹々として愉快に勉學することを得るは、啻に舍生の幸福のみあらんや、

（浩　額）

◎寄宿舍の非常召集

流るゝ水も眠るてふ丑の刻にはあらねど、未だ東の空さへ白まぬ頃、忽ち轟く非常召集の喇叭、一聲は高く、一聲は低く、劉亮として舍內に響き渡れり、八十の健兒は熟睡の夢を破られぬ、スハ何事あらんと打ち驚き枕を蹴て起き上り、同室の者ども呼び起しつ、今までは唯鼾の聲の折々聞ゆるばかりにて、いと靜かありし寄宿舍

も、此喇叭の一聲に寂莫を破られて又もや例の騷ぎは此處彼處に起りぬ、急ぎ〳〵て制服を着け、走りて前庭に出づれば早や數十の健兒は群がり集ひぬ、やがて主任舍監は人員檢査を行ひ「只今非常召集の結果を見るに、早き者は十分遲きも二十分にて打ち揃ひしは意外の好成績であつた」との褒詞の下に、各自の辨當を分與せられ「いざこれより一同余が指揮に從ひ來るべし」とて校門を出でゝ南に向ひぬ、時は去年十一月十六日の午前三時のことにて、折しも十日ばかりの月は中天にかゝりてもの凄く冴え渡り聞ゆる者は犬の遠吠のみにて、あたりの景色は人をして凄然たらしめぬ、未た充分に目の醒めぬにや、聲高く歌ふ程の者もおし、たゞ舍監の嚮導のまゝに川原町を眞直ぐに進み大堀村に入る、これより尙進みて多賀に至りしも多賀大社の門扉猶閉ぢられて入るを得ず、こゝにて携へ來れる握飯を喫り始めぬ、かくするうちに東の空も漸う紅に彩られしかば一行大に勇みたち、これより傍おる多賀山に登りはじめぬ、この時漸く夜は明け離れて炊煙長く棚引き渡り山の麓は薄霞につゝまれていと心ちよき眺おりき、登りては降り、降りては又登り、道おき道を辿りつゝ、これとて目指す目的地無きまゝに、紅葉せる秋の木の葉を錦に見做し蹈み分け進む程に、山は益々深く、山また山の果ても無し、折しも秋の末つ方おれば、木の葉の色は黃おるもあり、綠おるもあり、青紅交々相混りていとうつくし、かたへおる人、仙境とはかようの所をいふにおんおどゝ、もの識り顏に語るもおもしろし、かくて進み行く程に遂に杉板といふ所に達しぬ、こゝにて十五分許り憩ふ、眺むれば膽吹の山は巍然として北方に聳え、靈山は其南に連る、近きは多賀高宮彦根おどの町を眼下に見瞰し、遠きは水を隔てゝ長濱の町も遙かに眺められたり、時に時計九時を指しぬ、一同之より山を下りて多賀大社に集合し、こゝにて小出先生より一言挨拶ありき、其要にいはく、兎角近畿地方の人間は何か事ある時は、あゝ叶はぬ、もう叶はぬと益おき不平

を洩らすが常おり、しかも此等の語が日頃健脚を以て自ら稱し、活潑を以て誇り、運動家を以て自ら任じ居る人々の口より發せらるゝは實に奇おらずや、然れども諸子が本日よく此艱苦に耐え忍びよく舍監諸先生の命令を遵守せられしは舍監一同深く滿足する所おり、余は此擧が諸子の氣風を養成するに與りて力おるを信ずと、こゝにて各自解散を許されしかば皆歸途を急ぎぬ、（浩額）

◎發火演習　治に居て亂を忘れざるは、先王の敎おり、されば古より、天下に志おるものは、詩書を涉獵するの傍、常に武事に心を寄せ、所謂文武の士たらんとを欲せり、然り而して、今や東洋の風雲益急おるにつれて、益々軍國の務は一日も忽にすべからざるおり、吾等元一介の學生おりと雖、未來に於ける國家の干城を以て、自任とするものおり、豈徒に机上放言をおすを以て、能事とすべけむや、宜しく野に伏し、劍を枕にするの用意おかる可からず此を以て我校は、十二月六日を卜して、發火演習を犬上河畔、高原十里の所に行ひ、以て武事を實地に磨き、併て志氣の鼓吹を計りぬ。

十二月六日、蒼空雲おく天色拭ふに似て、燦爛たる星晨漸く耀輝を失ひ、曙光遙に東天に發するころほひ既に校庭に集るもの四百、劍戟の音鏘然として勇しく、軈て集合喇叭の下に一同集合して、部隊は左の如く編成されぬ、

防禦軍指揮官　池田先生

幹部五、一中隊四乙一甲乙一

攻擊軍指揮官　福永先生

幹部五、二中隊四甲三二

かくて我が攻擊軍は、大洞街道を鳥居本に向て出發しぬ、嵯峨たる嶮坂を攀づれば、鏘然たる武器の音は、谷間に響きてねぐらの鳥を驚しぬ、折しも曉風徐に征衣を吹いて心地よし、漸う〳〵木の間より出でたる朝日の光は、劍戟に映じて勇しとも勇まし、かくて鳥居本の北端、矢倉河畔に着し、此所にて福永指揮官より左の命令を傳達さる、

想定

敦賀に上陸したる北軍は、大垣に向ひ鉄道輸送中、一枝隊を米原に下車せしめ、中仙道方向に對し援護に任じたり

京都に於て編成せし南軍は、東海道を名古屋に向ひ前進中、一枝隊をして中仙道を北進せしめたり。

十二月六日、午前八時北軍枝隊は、米原に於て左の情報に接す。

一、敵の歩兵斥候は、今朝南五ヶ莊附近に徘徊し其集團せるものは、武佐を發し北進せりと、又愛知川橋梁は漲流の爲め、一部破損しありと。

前衛命令

一、敵は今朝武佐を發し、中仙道を北進せんとするもの〻如し

二、枝隊は米原援護の爲め、芹川以南に前進せんとす、

三、當隊は前衛に任せらる

四、騎兵分隊は、荒神山及愛知川方向を搜索すべし

五、一大尉は、二小隊を率ゐて、前兵となり中仙道を高宮に向ひ前進すべし

六、門根分隊長は、兵卒六名を率ゐ、下士斥候となり正法寺及野田山方向を搜索すべし

七、殘餘は本隊となり、二大尉引率して、前兵の後方約四百米突に在て隨從すべし、

八、予は前兵と共に前進す

かくて暫時休憩の後、尖兵を區分して前進す、折りしも騎兵斥候は報じて曰く、敵の歩兵一大隊は、犬上川左岸に達し、橋梁修理をおさんとするもの〻如し、又其一部は渡河せんとしつ〻ありと、依て前衛は速かに小野村より原方向に急進す、十一時半斥候忽ち報じて曰く、原南端に敵現ると、蓋し南軍下士斥候の出沒しつ〻あるあり、衆勇躍して曰く盡殺すべしと、折りしもズードン、ズドーン、すは斥候衝突よと見渡せば、白帽所々に出沒して、硝煙時々森叢に起れり、地圖を按じたる指揮官は、前兵に擊退を命ず、前兵の原南端に至る頃、敵は鹵を恃みて甚

しく砲擊を始めしかば、我軍何ぞためらはん、烈しく應砲する程に、かゝはじとや思ひけむ、敵は漸次退却しはじめぬ、すは機こそきつれと、突擊を試むれば、敵は散々にかりて打ち退く、折りしも敵の本隊は地藏村附近の丘陵に、一大戰線を張りて、防戰最努めたれば、容易に追窮すべからず、乃ち指揮官は本道枝隊をして、敵の左翼を極力牽制せしめ、一枝隊を以て野田山麓より、敵の右翼を衝んとせり、敵は鹵を恃みて屈せず、死力を盡して戰ふ、兩軍より打出す銃聲は山岳を震し、硝煙は天を蔽ひて凄じき事限おし。此時既に野田枝隊は、敵の右翼に迂回して、急射擊を行ひしかば、敵は狼狽して、右翼より先づ敗れて倉掛山方向に退却せり、我軍勢に乘じて之れに肉薄し、烈しく砲擊す、山岳爲めに鳴り、江河將に裂けんとし、硝烟は漠々として、乾坤を蔽ひ、血は流れて河をおす、之れ當に現世の修羅の巷あり。折りしも起る吶喊の聲と共に、天地に轟く鬨聲と共に中堅望んで吶喊す、相距る將に五十米突、忽ち休戰喇叭ば淸く響きて、戰は全く終了しぬ

かくて兩軍は犬上河に集りて、晝食して後歩武齊々歸校しぬ、一同集合の上福永先生の講評あり要に曰く。

一、最初命令を與ふるに方り、一般熱心に之を聞き確實に服膺せしは大に可とす

二、斥候報告を連絡兵に申繼せしめしは不可、報告等の傳令使は其任重大あり、決して隨意交代すべからず、能く傳令勤務法を守るべし

三、斥候敵を發見せし時の動作不充分あり、斥候は敵の數、動作を報告すると同時に、敵の密集部隊の有無を搜索すべし、敵に心を奪るゝ傾きあるは注意すべし

四、射擊の緩急は稍可あり、されど散兵の隊形甚だ不齊一にして姿勢充分からず、又照準せすして發射する等は不可あり

五、中隊長小分隊長の動作、未だ不充分あり、宜しく研究すべきあり

六、之盖し凡て對敵の志想に乏しきを以て、以上の欠点を來せおり、一傳令の誤りは全軍の敗とおり彈丸雨中にある動作の不良は、一の命令に關するを思はゞ敢て以上の欠点を來すおからん、よく注意すべし。

右終りて解散す、時に四時五十分

◎長距離競走　學校ば押松を養ふ所にあらず。能く一日千里を行くてふ駿馬を育つる所にあらず。一晝夜に新橋より神戸まで長驅する滊車を製する所にあらざる也。はた、郵便脚夫を造り出す所にも非ざれば傳書鳩の飼育所にもあらず。是に於て制服着用登山競走の理由明白とおるおり。

試みに思へ、軍用靴の重量が如何に登山に困難を來たすかを。然り而してこの困難こそ實に吾人が特に滊車製造所に非ざるを述べし所以おれ。吾人は茲に運動の要を喋々するを欲せず、はた、競走の目的を呶々もるを欲せざる也。然れども制服着用登山競走が何の爲めおるかを明かにしたるのみ。

十二月三日午后第三時、數十名の健兒はかねての募に應じて本校の運動場裡に集合せり。すらりと居並びたる面々何れも逞ましげの男のみと思ひきや。年は十四、五尺に足らぬ身の丈に、蒲柳の質、風に得堪えぬげおる面々まで制服制帽凛々しく、今日こそと肩を聳びやかせり。

先づ、平瀨陸上運動部長よりこの競走に就きての注意あり。その要に、曰はく、校門を出で、佐和山の頂に登り、直に引き還し、校門に入るべしと。午后三時十六分、一聲の喇叭に喊聲をあげつゝ校門を馳せ出でぬ。目指すはかの佐和山、麓までは半里足らずの里程、何のこれしきがと勇み勇んで走るは、走るは、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

午后三時四十五分！

横におりつゝ飛んで歸りしは淺見一雄君おり。次で十秒おくれてラインに入りしは宮田與惣松君。更に二十秒をへて、北川九一郎君馳せ歸れり。それよりどし〳〵と、見る間に十六着までラインに入りぬ。かくて、各優勝者に賞品は授けられたり。午后四時三十分無事登山競走は結了せり。茲にこの競走に賞を授與せられたる名譽ある健脚家諸君の姓名を掲げんとす。あゝ、吾人は光榮ある諸君の健在を祈るや切おり。

第一着　淺見一雄（四年）
第二着　宮田與三松（二年）
第三着　北川九一郎（四年）
第四着　菱川藤九郎（三年）
第五着　田中恒太郎（三年）
第六着　小倉雅吉（五年）
第七着　秋篠義一（二年）
第八着　中村藤藏（一年）
第九着　大橋利三（二年）
第十着　竹内賢吉（四年）
第十一着　岡野久次郎（三年）
第十二着　中西源澄（三年）
第十三着　山田隆吉（二年）
第十四着　室谷喬三（五年）
第十五着　玉樹顯曜（五年）

◎伴先生と増田先生　灑々たる畫筆に、琶湖の趣を寫し、わが校の兒をして繪畫の吾人の精神に與ふる絶大の趣味を不言の間に敎へ給ひし増田先生は今回大分縣中學校に行かれ、その後任として吾人は伴先生の來りて敎へ給ふの榮を得たり。増田先生が熱心おる敎を垂れ給ひしは吾人の忘るゝ能はざる處、我校生徒たるもの深くその腦裏に之れを記臆すべきおり。若しそれ如何に懇切に伴先生が吾人を導き給ふかに於ては吾人は將に活目して待つ所あらんとす。

◎劍柔兩道大會　鷹碧落に飛むで、青紙に書するが如く、隼霜林を擊て、錦機を破るかと疑ふ、頃は、十二月七日、我が陸上部劍柔大會は開會せられぬ、演武場は、例によりて、生徒扣所を以て之れ

にあて、劒道は午前、柔道は午後に、擧行せられぬ今左に其概畧を記さん、

午前九時と云ふに、坂吉井の両先生の、審判の下に今日の大會は、次第に開かれぬ、其中最も目を惹きしは、

成瀬十郎、青木九一郎、年少新進の士、斯道の熱心と堪能を以て現はる、小兵ありと雖、其大刀筋の美しき、右に打ち左に結び、一上一下此所を先途と戰ふさまは、老功の士も、啞然たる計りあり、戰稍久しくして遂に勝敗決せず、分けとありしは遺憾ありき、

東郷安次郎、中川作平、四段の驍將、互にしばしにらみ合しが、東郷は鋭き大刀風と共に、御面と叫びぬ、ひらりと身をかはしたる中川は、日頃の手並今日ぞ示さんと、無二無三に攻かけ、打ちかけゝれば受大刀にかつたる東郷も、さるもの左に結び右に拂ひて、必死にありて戰ふ、されと久しき戰に漸く勞れて、大刀先少し鈍りしかば、中川は得たりや此所ぞと、無二無三に切り立て、弱る所を眞額微盡に打ち碎きたり。

山本半七、中川俊治、中川の大刀荒きは、我か校屈指あり、山本は又小手の妙手あり、いかゐる活劇の起るらんと、皆手に汗にぎりけり、軈て立ち上りし中川は眞額微盡にあれと切込んたり、得たりや應と山本は、右に拂ひ左に結び、秘術を盡して防ぎしが遂に小手一本參られたり、山本は之れに勵されて、勇氣日頃に十倍して、刀の刃もつゝかぬ迄でに戰ひて、弱る所を疊かけ、細腕丁とうち落したり

大東三男、西村正一、ヱイヤと打つ大刀を、西村右にかはして胴を打てば、心得たりと大東、左に拂ひ丁々發矢と、電光の如く切り結びしが、西村もとかしとや思ひけん、組打！と大手擴けて打向へば、大東劣らず大刀打捨てゝ、むづと組む、組まれてヱイと引けば、力餘つて後へドッと倒れけり、人々息はつまする程に、大東忽ち跳ね反して上にあれば、又もや反を米苞、上にあり下にありて、必死に揉み合ひ、へし合ひしが、遂に勝負付かずして分けとはありぬ。

高橋茂十郎、中川俊二、互に劣らぬ剛のもの、丁々ばしシと刀尖より火を散らす、一上一下、手練の大刀風もの凄く、恰も南山の猛虎、北海の蒼龍と共に勢を奮つて戰ふが如し、中川必死の勇を奮へど痛く勞れて、大刀先漸く亂れて遂に恨をのみて倒れぬ。

門根米治郎、廣崎浩一、門根の御大將は、打物取ては鬼神をも挫かん剛の者、それに引換へて廣崎は、敦盛まがへの優男あれど、大刀尖き鋭くて、中々の曲者あり、やがて雙方立ち上るや、迭に氣息を伺うて、丁と打てばあとへに退き、右にかはし左に飛びて、一上一下虚々實々、此所を先途と戰ひたり、折りしも如何あるすきをや認めけん、廣崎微塵にあれと、眞額望んで打ち下すを、門根丁と受け留め、返す拳につけ入りて眞額梨割、何かは堪らんあッとぞ仆れける。

門根ー西村、高橋、山本、門根に三人掛り、扨て如何ある試合の始らんと、片唾を飲む折りしも、先づ西村立ち上りて、無二無三の死物狂にあつて攻め立てしが、門根は右にかはし、左に避けて、程よくあしらひ敵の弱る所を、疊みかけゝれば、西村あしらひ兼ねて、四度路にある所を、丁と細首打落されたり

高橋亞で向ふ、高橋勇ありと雖も、新勝の敵に當り難く、追立てられ攻め立てられて、遂に果あく消にけり、門根の勇氣は日頃に十倍し、いでやもの〳〵しき山本、唯だ一打にと切り込めば、山本心得たりと鋭き掛け聲と共に發矢と受け留め、受け流し、頻に盡す手練の秘術に、門根よき敵を得て、勇氣彌倍して、刀尖より火出ずる迄で戰ひたり、彼の両虎深山に挑む時、錚然として風起るもかくあんと、思はれて勇しき事限あし、されと身鉄石にあらされば、門根漸く勞れ來て、大刀先次第に鈍りて、受大刀とありぬ、山本茲ぞと必死にありて戰へば門根受け兼て、四度路もどろとあるを、すきをねらひて、ヱイヤと切れば、ズンバラリンと小手は奇麗に落されぬ。

之れにて劍道は全く終れり、時十二時半。

午後一時より、山上先生の審判の下に柔道は開かれたり、其中面白きは。

有川、大日方、猫の轉び戯るが如く、上にあり下にあり、組みつ組まれつ轉々ころがり回る、大日方こゝぞと籠手ナタ取れば、有川スラッと扳く早業、之は豪いと見る間に、大日方上にありしが終に、手ナタを以て有川を參らしぬ。

淺見＝山本互に劣らぬ剛のものあり、ヤッと立ち上りし山本の、樣子怪しと見るまに、すきをねらひて、ヤッと投げを懸けんとす、淺見危くのがれて、エイヤと組付て引けば、後へどーと共倒、山本得たりやと上にあれば、淺見又もや跳ね反す、ころ〳〵〳〵と雪中の小犬よろしく、ソラ今山本が籠手ナタやられたと、手に汗握るものあるに、スラリと扳く中々見事、折りしも跳ね上りし山本、ット組まんとするを、淺見物の見事に投げにけり

次は門根氏、受方とありて、不動流の形數番を演せらる、物の見事に、ヤッ〳〵と演じ、一寸の隙おきは感心々々。

かくて之終りて本日の大會は全く終了しぬ、唯だ吾人は一般生徒の技を戰はさゞりしと、試驗前あるべけれど割合に參觀するもの少かりしは遺憾とする所あり

◎新井先生を送りて伊藤先生を迎ふ

國語の學科は實に愉快あり――國文は興味多きものあり、――快活あり、と由來、恰も夢の如く、醉へるが如く、死せるが如く、又宛も紙鳶の空に眠れるがごとく、敎はり、學び來りし學科をして、かく興味を感せしめ、學ばしめ給ふに至りしは果してこれ誰人の大恩とおすか、曰はずして諸子は、新井先生ありと答へん、嗚呼先生の鴻恩は、琵琶の水も、伊吹の山も、いかで物かは。

先生博學よく古文に通じ給ひ、生等を導き給ふことその活氣あり又明淅かる、由來其比を見る能はず、生等欽仰敬慕、措く能はず。加ふるに生等を愛し給ふこと親の子におけるよりも、いやしたしく、あるはボートに驅りて、多景嶋に供せしものもありて、彼等は腦を清き琵琶の水にそゝぎて、先生の高訓に接しぬ、此水、この島、この子等、我四百の弟等はあえおくも、この高師を送りつるよ、

先生は又我雜誌部の副部長にて、盡瘁せられしこと多々、筆にいふべき限りにあらず、謹みて生等は感謝したてまつるあり。

新井流吟詩譜は已に世人の知るところ、生等を泣かしめ給ひし「先帝崩御の事」（太平記）は、久しく耳に納まりて失せざるところ、さゞ波や滋賀一中の子等、ひそかに、嗟嘆の聲をあすもの、いまあほ絶えず

新井先生に代りて、我敎鞭を採り玉ふを、伊藤先生と申し奉る、先生は國學院優等の卒業生にして、曩きに德島縣中學に就職せられしありといふ、溫篤にして、卑しからず、實に斯科の好先生、生等一見して唯其風采に服し、一たび鞭たれては、其宏學に感せざるを得ず、乞ふます〳〵鞭一鞭、叱一叱を賜はらんことを。

◎第二學期試驗　春去り夏過ぎ、早くも雁渡る頃とおりて、吾人が一大難關たる、第三學期試驗も十二月十六日に始り、無事二十二日を以て終了しぬ因に記す冬季休業は其日より始りぬ、

◎新年拜賀式　坤軸一轉、陽光一度動き群妖皆息す、抑も明治三十六年開春の第一日、吾人は齋戒沐浴して上は聖壽の萬歲を祝し、下は同胞の平和を賀す、恭しく惟るに我叡聖文武ある　天皇陛下には、本日正殿に親臨し給ひ邦家の安寧、寶祚の無窮を四方の天神地祇に禱らせらる。乃ち我校も亦例によりて拜賀の典を講堂に擧ぐ、午前九時職員生徒一同臨場するや、先づ君が代を三唱し、次に校長謹んで御影開扉、一同に代つて賀辭を奏せらる、此間一同最敬禮をおす、次に校長より懇ある訓示あり、閉扉終つて再び君が代を三唱し、式全く終る。

◎第參學期始業式　一月八日例によりて開校

の典を講堂に擧げらる

◎兎狩　十二年目に廻て來て此年は卯の年である、其の卯の年に兎狩をする、惡ひか、いや惡ひ筈はない、卯とは只年の名だ、十二支の名だ、人が假りに附けた名だ、而し思へば變な感じもする、なんだか氣懸りなようだ……、いやそれは阿婆さんなどの云ふ言である、明治の人間からば、女でもそんな解らんことを云ふまひ、まして男子、立派な明治の青年、それがどうして夢にもそんなことを思ふものか、相變らず、例年と同じ氣持で、兎の七ッ八ッも捕へる意氣込である、で掲示が出ると四百の健兒は皆勇みに勇んだ、

それは丁度二月　日であつた、六時の集合とは余り早ひかと思て居たにも拘らず、存外集まつた、深ひ〳〵霧の中を劉亮たる喇叭の聲と共に進行したのは實に勇ましかつた、九時過ぎ敏滿寺村に着たが霧はまだはれない、池の邊で再び隊を齊へて、豫定の如く、五年は網番、四年は幹部、三年は人籬、二、一年は共に勢子となつて全体を甲乙二班に分けた、甲班第一陣、網は適當な場所に張られた、今か〳〵と待て居ると、一聲の呼子笛は長く森に響いた、すると忽ち遠くから森がうなつて來た、地震の如く地が震ふた、さー御ざんなれ兎先生一匹も遁がすものかと、網番連中息を凝らして目をギロ〳〵さして居る、而し兎先生も度々此の危難に出逢つた經驗がある、どうしてそう甘々、本ばかり讀で居る、野には鈍い學者連中に捕はれるものかへ「そら來た、飛んだ」、勢子が呼ぶ、シッシッ、網番はうそつく、四百の物知先生御用心なさひ、そこの隙間が見へませんか、と、兎先生は口があつたら言ひた相な顏付きで、割合に落着て、草叢を盾に狙て居る、而し飛だ、發つと飛だ、バタ〳〵〳〵、捉めたか、しつかり、それ……、あはれ網は空しく亂れた圍を破た兎は所謂脫兎の勢でもつて再び森中に、網番の氣抜、勢子の失望、さもあるべきことである、網番は勢子を責め、勢子は又網番を責めた、而し公平な眼から見ると、

網番にも罪があるが、勢子もあまり亂雜であつた、第二陣、先陣の報を聞て飛で來た福永先生は、例の快辨で以て、乙班との競爭だから、負けた時には、割腹して恥を雪がねばならないひと云はれたが、一同はどうと笑ふた、而し悲しい事には午前午后を通じて凡て七回であつたが、甲乙両班を通じて皆遂に得る所なしであた、殊に最後の一回は両班合併してやつたのであつたが、兎の顏さへ見ることが出來なかつた、あゝ兎の年には兎はとれないものか知らん、そんなことはさて措いて、最も氣の毒であつたのは始めての人である、而し其等の人に忠告するが決して落膽するには及ばん、失望することはない、物には皆運命と云ふものがある、運さへあれば、どんな年でも捕れる、十でも二十でも捕へられる、だから今年でこりずに來年もやらうよ、勇ましくやらうよ、

◎東島先生　先生は等五高等學校の出身にして夙に中等教育に從事せられ、學力經驗共に、豐富なりと、吾人は此の良先生を得たるを喜ぶものにして益々先生の、我校の英學界に貢獻せられん事を切望するものなり（一月八日）

◎端艇競漕會記事　一月三十日孝明天皇祭といふ日をトし大洞入江に於て端艇競漕會を開催せり此日寒風甚だしく湖上、波穩かならざりしと雖も、我校四百の健兒何ぞ憶せん、午前十時號砲の下に腕鐵の如き漕手シャツ一枚サル股一ッにて意氣凜然として競ひ初めぬ。軈て一回二回と順を追ひて、遂に二十一回にも及べば、薄暮漸く迫りて寒風益々烈しく、城山の時鐘五杵を報ずれば此に競漕は全く終りを告げぬ。

◎遠距離競走　紀元節の祝賀式は終りぬ。軈て集合喇叭の聲は高く低く響き渡れり、夜來の薄雪を拂ひ去りたる、運動場の寒き風をきつて、いかめしく武裝せる四五年級、凜々しく整裝せる一二三年級は間もなく、喜ばしげに列を整へぬ。午前十時を過くる三十分、足並そろへて、校門を出で道を東南にとりて、進むこと一時あまり、大堀川

原に至りて休憩す、時に武裝隊は鞍掛山へ走せ登りつ、一號令の下に、一齊射擊の銃聲は天地を動かさんばかりに、山頂に起りて物珍らしげなる、近村の人々を驚かさしむ。

風は益々寒し、さはれ、勇氣にみちて、背に汗したる、四百の健兒は、當川原に於て、漸く晝食を喫せり、時將に十二時、これより、競爭はじまる。先づ大堀村より中仙道街道、原、小野、を過ぎ右折して切通し坂を越え本校々門に達するまでなり。

午後十二時半といふに一發の號砲、スタートを報じぬ。こゝに於てか無數の勇者、崩れたる大波の如く、瞬間に走り出でたり、武裝せる生徒の、躍り上がる背嚢、重げなる銃劍、流るゝ汗も一入なりき、息はずませて飛ばんばかりに走る勇ましさ、さても譽ある月の桂は誰が冠上にかざゝるべきか。

一着！この譽ある勝利は、武裝隊にありては中嶋俊一、徒手隊にありては秋篠義一、團体にありては第一年級の得るところとなりぬ。

嗚呼この愉快なる競走！吾人は鞍掛山頂の轟砲と共に永く腦裡を逸せざらん事を期す、快！

因に我雜誌部より出でゝ月桂冠を得たる勇士の姓名を錄すれば

武裝第五着　五年級　野村義雄
武裝第七着　五年級　廣部智圓
武裝第八着　五年級　賀來俊一

◎北古賀先生　先生は佐賀の人なり、曩に業を物理學校にうけ、永く中等教育に從事せられしか、今回本校に教鞭をとらるゝ事となれり、吾人は良先生を得たるを喜ぶものにして、益々本校の爲めに、盡力せられん事を切に望むものなり。（二月廿八日）

◎抹殺　本誌理事を愚弄せんとの惡意に出でしものか、はた、會員諸君の聰明を眩惑して以て虛名を博せんとの劣情に出でしものか、吾人は不幸にして崇廣文壇の神聖を冒せる鼠輩を茲に筆誅せざるべからざるのやむなきに至りぬ。

之れを掲載せし理事の不明淺學なるは深く躬ら恥づる所なりといへども、吾人は常に信を會員諸君に置き、敢て疑念を以て諸君の投稿に接せず。されば、諸君が寄せらるゝ所の原稿は已に一片の疑念をさしはさまず、名篇を得れば則ち之れを掲げ、玉章を得れば則ち之れを錄す、而かも吾人は諸君の奮勵と諸君の勤勉とを常に嘆稱して止まざりき。然るに意外、意外、又意外、この信を置きたるが却つて神聖なる崇廣文壇に『汚れ』の影を印して、永く吾人をして遺憾の語を繰返さしむる基因とならむとは。

吾人は敢て宣言す、諸君にして本部員に對して他かざるものならば、正々堂々紙筆をかつて之れを論難すべし。何ぞ陋劣なる手段を以て悖德の擧を敢てするの愚をなすの要あらんやと。吾人は其陋劣を惡むものに非らずして、その愚とその醜とを憫む者也。況んや八百の眼光を眩惑せんとするの擧に於てをや。

虛名虛榮の爲めに眩惑せられ、遂に前後を忘却して悖德の擧をなす事は青年の往々滔り易き弊なり。然れども單に弊なりと云ふのみを以て觀過すべからずさればとて吾人は敢て其名譽を毀損するを欲せざる也。然れども、崇廣文壇の神聖を保たんと欲する吾人は斯文を抹殺するの要を見るなり。希くば諸君、各々猛省して以て吾人をして再びこの言を吻々せしむるの醜體を演ずる勿れ。

茲に左の文を抹殺す

靜女緒環の歌後に書す（第十七號誌上）

◎投稿せられたる諸君に告ぐ　諸君の寄せられたる金篇玉章、積んで山をなせり。限りある紙上悉之れを掲載する能はず。遺憾ながら之れを次號に掲ぐる事とせり。諸君乞ふ之れを諒とせよ。

◎第二回懸賞文當撰者左の如し

五年級　那須開神
四年級　野村佐一郎
四年級　橋本久一
四年級　山本繁七
三年級　北村力

◎佐藤、田中兩先生　去歳、佐藤先生は英語科、田中先生は數學科の教壇に吾人を指導し給ふべく、本校裡の人となり給ひぬ。すでに、その明快なる御教導に、著大なる進歩をかち得たる吾人は、なほ、ほしいまゝに永く先生の職に本校につくされむことを希ふ。

◎草塲先生　さきに坂田先生を送りて、由來振はざる英語科を如何にせんやの嘆聲をいやすべく、先生は富嶽のもと、山梨中學より來任せられつ、先生は大學出身にして、其學殖に經驗に、深且つ大なる、いはんも愚なりや。いまひたすらに、至難なる英語科に、この良先生を迎へ得たるを喜ぶものなり

會告

◎新入特別會員姓名

坂廣　東嶋清次　北古賀力餅

◎新入通常會員姓名

滋賀縣犬上郡彦根町大字石ヶ崎町　山田功
滋賀縣高嶋郡朽木村大字地子原　上山佐一郎

◎寄贈雜誌

龍南會雜誌第九十五、六號　第五高等學校龍南會
六稜第二十二號　大阪北野中學校校友會
稱好塾報　稱好塾
華陽三十號　岐阜中學校華陽會
學友會誌第三號　京都第二中學校校友會
學友會雜誌第八號　嶋根第一中學校學友會
京華校友會雜誌第十三號　京華校友會
保惠會雜誌第七十九號　松山中學校保惠會
山本同窓會々誌第二號　山本小學校同窓會
近江尚商會々誌第四拾五號　近江尚商會
梧蔭塾報第八號　梧蔭塾
文武會誌第一號　奈良畝傍中學校文武會
校友會雜誌　三重第一中學校校友會

◎投稿規則

一、投稿ハ學術ノ範圍ニ於テシ決シテ政治的時事論ニ渉ル可カラズ
一、投稿ハ本會所定ノ用紙ニ楷書ニテ認メ平假名ヲ用フベシ
一、投稿ニハ各自句讀ヲ施スベシサレド圈点ハ一切施スコトヲ禁ズ
一、投稿等其ノ篇ヲ異ニスル毎ニ其ノ用紙ヲ改メ題ノ下ニ級組及ビ姓名ヲ明記スベシ
一、投稿ハ其ノ長短ヲ問ハズ全篇定備セルモノタル可シ
一、投稿ハ其ノ揭否ニ關ラズ總テ之ヲ反戻セズ
一、投稿ノ締切期限ハ其ノ都度之ヲ定メテ一般ニ通知スルモノトス

明治廿七年五月卅日內務省許可
明治三十六年三月廿七日印刷　（非賣品）
明治三十六年三月廿九日發行
滋賀縣犬上郡彦根町大字中組東
第二十三番屋敷　編輯兼發行人　木川雅太郎
岐阜市笹土居町四十五番戸　印刷人　安田豊八
岐阜市笹土居町四十五番戸　印刷所　安田印刷工場
滋賀縣立第一中學校　發行所　崇廣會